

日本口腔インプラント学会
第21回関東甲信越支部総会
学術大会

プログラム・抄録集

会 期：平成14年2月10日
会 場：都市センターホテル
主 催：日本口腔インプラント学会関東甲信越支部
大会長：深井 眞樹
主 幹：日本インプラント臨床研究会

渡辺 邦太

サイナスリフト・洞内突出インプラント周囲の組織像

○渡辺孝夫、清水治彦、日高豊彦、佐藤享¹⁾、
高橋常男、岩野清史²⁾、池田哲哉³⁾、浅井澄人⁴⁾、
山内典男⁴⁾

鶴見大学歯学部第1口腔外科学教室¹⁾、
鶴見大学歯学部顎顔面インプラント科²⁾、
神奈川歯科大学口腔顎顔面学教室³⁾、
日本歯科先端技術研究所⁴⁾

I 目的. 我々はサイナスリフトにおける骨造成の組織学的観察をするためイヌ前頭洞を使った一連の動物実験を行っている。今回、インプラント体が洞内に突出した例についてその周囲の組織学的観察を行ったので報告する。

II 材料および方法. 雑種成犬 33 匹、66 側の前頭洞を使用した。全身麻酔下、前頭部露出後、左右前頭洞に 5×7mm 大の骨開窓 (65 洞)、挙上洞粘膜下空隙形成 (63 洞) 後ブローネマルクインプラントを植立 (45 洞)、各種補填材を填塞したもの (50 洞)、洞粘膜の搔破のみをしたもの (2 洞)、開窓せずにインプラントを直接洞内に穿孔植立 (1 洞) など各種の設定による処置を行った。観察期間は1週、1, 2, 3, 6ヶ月であった。所見は前額断したものを肉眼的および組織学的に観察した。

III 結果. インプラントが既存骨に位置し、肉眼でその一部が挙上スペースを超え、洞内に突出しているものを対象とした。10 例で洞内に突出したインプラント体を観察した。このうち 4 例は組織学的にインプラントの突き出た部分は洞粘膜で被覆されていたが、残りの 6 例は被覆されていなかった。

IV 考察および結論. 肉眼での洞内突出インプラントの頻度は 30.3%と、一部、意図的な例があることを考慮しても、比較的高かった。更に、既存骨での骨結合の有無、補填材の有無と種類、周囲の炎症の有無との関係などについて検索し、洞内突出インプラントを臨床的にどう扱うか、検討した。